近代

大正・昭和前期

県庁前を走る馬鉄

3　葉隠と史談会の活動……七五九
(五)　戦時下の教育……七六六
1　戦時期の教育事情……七六六
2　佐賀市の教育事情……七七五
八　戦時中の市民生活……七九九
(一)　戦時統制の強化……七九九
(二)　市財政の戦時的性格……八一六
1　財政規模の膨脹……八一六
2　歳入の分析……八二〇
3　歳出の分析……八二五
(三)　破局に向かう市民生活……八三三
(四)　市民からの戦争決算報告書……八四八
1　「銃後」の生活……八四八
2　空襲の体験……八六七
3　敗戦……八八一
年表……八九四
編集後記

概　説

大正初期から昭和二十年ごろまでを本巻では扱う。この時代は、第一次世界大戦、満州事変、日中戦争、第二次世界大戦（太平洋戦争）とまさしく戦争に包み込まれた時期であった。それは、政治、経済、文化など各分野の諸問題が、日本的のみならず、世界的規模で相互に影響しあう状況になったことの反映であり、そこから起こる矛盾を戦争という手段によって解決しようとしたことからきたものであった。

第一次世界大戦による戦時景気は、日本経済に大きな刺激を与え、各分野で事業活動が盛んになった。佐賀紡績株式会社の設立などは、それを象徴するものであった。しかし、戦争終結によって経済状況は変化し、いわゆる反動恐慌が来襲して経済活動は停滞した。この状況はその後の慢性不況、金融恐慌、世界恐慌によって一段と深刻になった。

政治的には、大正デモクラシー運動による自由と民権の拡大を求める大衆活動の反映として政党活動が活発になり、激しい政争が繰り広げられたが、これらも治安維持法の改正によって次第に沈滞化し、民衆運動も統制されるようになった。

経済的には、第一次世界大戦期には諸会社の設立が相次ぎ活況を呈したが、戦争終結による反動恐慌によ

って経済活動は沈滞した。このため、従来佐賀地域で重きをなしていた諸会社の休業または倒産が相次ぎ、影響力の大きかった諸家が没落していった。農業部門では、これまでのクリーク農法を転換させてゆく生産力的基盤が培われ、また教育文化面では、大正デモクラシーに象徴される新しい息吹きを受けて、明治期と異なって明るく活気に満ちた動きがみられたが、反動恐慌以降は沈滞化し、次第に暗いムードに包まれていった。

このような状況にあって、佐賀市は神野村を合併して行政区域を広め、また水道・ガスを敷設して近代都市への転換がはかられた。特に上水道は、佐賀市の住民が飲料用水に使用してきた川の汚濁がひどくなり、飲料用水に適さなくなったことより敷設されたのであるが、それは人口増加、生活様式の変化などの反映でもあった。

ところで問屋、小売商と手工業者を中軸とした旧城下町佐賀市の商工業も、諸企業の営業活動の展開に呼応して規模の大きい工場が第一次世界大戦期の戦時景気によって出現し、市の様相が変化した。佐賀紡績株式会社を始めとして製造業を基軸とする諸会社が設立された。また製造業の進展が他の部門の発展を促したという意味では、日本電機鉄工株式会社と佐賀地域農業との関連が注目される。「佐賀段階」形成の生産力的基盤づくりに日本電機鉄工株式会社製造の機械灌漑ポンプが貢献したことなどは、単に社会的分業の進展や産業連関の強まりということだけでなく、全国的水準においても、先進的地位を確立してゆく佐賀農業を地域産業が支えたことからして、停滞的とみられてきた佐賀地域製造業の明るい側面を示すものであった。しかし、日本電機鉄工株式会社の動きも、経営不振の中で必死に努力したことの所産であったように、反動

恐慌によって地域経済は大きく転換し始めた。佐賀財閥といわれた深川家も、その経営する深川造船所、深川汽船が業績不振になり、大正末期には昔日の面影はなくなった。また銀行分野においては、有力銀行であった神埼実業銀行、古賀銀行が大正末に休業したが、これら一連の動向は、佐賀地域の社会構造が大きく転換しつつあったことを示すものであった。

ところで、大正期には社会運動が活発化したが、その激化したものに米騒動があった。佐賀市内やその周辺における米騒動は、暴動や打ち壊しなど激烈な行動を伴わなかったが、米価暴騰によって庶民は苦しめられ、救済を要する人々が多く出た。一応の救済は施されたが、社会問題への対応が一層必要になった。

米騒動を契機にして、社会問題が活発に論じられ、そのため、佐賀市でも、市営住宅の建設や公設市場の開設、職業紹介所の設置などがあった。一方、労働運動も組織的な活動が行なわれるようになった。

農業部門においては、これまで佐賀農業を特徴づけていたクリーク農法つまり踏車による揚水、漏水防止のための床締作業、二期作の稲作体系、年雇労働力の使用などを基軸にした農業生産の在り方は、大正末ごろから大きく転換した。機械灌漑によって揚水問題が解決し、それが更に晩稲一期作体系を可能にして、裏作の作付増加をもたらした。短床犁使用による深耕化は反当収量を増加した。こうして、大井手普通水利組合を中心にした機械灌漑の進行は、佐賀農業飛躍の一大契機をなした。

水産業においては、従来の定置網による漁獲体制から遠海漁業へと発展し、漁業様式も大きく転換した。他方、養殖漁法も次第に採用されるようになったが、有明海漁業もこれらの変化を受け入れて新しい動きがみられるようになった。

教育面では、佐賀高等学校の設立や佐賀商船学校の廃校問題にみられるように、時代の波を受けた変化があった。また新教育運動の普及に努力がはらわれた。一方、教育活動を振興さすためとして「佐賀育英会」が設立され、佐賀県の教育に影響を及ぼすようになった。

昭和期になると、反動恐慌とそれに続く慢性的不況によってすでに沈滞していた経済活動は、金融恐慌から世界恐慌にかけ一層落ち込み、なかんずく世界的規模で進行した世界恐慌の激浪に巻き込まれ、最早や第一次世界大戦期の旺盛な経済活動はみられなくなった。世界恐慌によって諸会社の休業と倒産が続き、そのため失業者が増加した。日本政府は、この深刻な事態を打開するため、中国への進出と経済の軍事化を強めた。

満州事変以後は、次第に軍事生産が強められたが、佐賀地域でも、経済活路を軍需生産に求める動きが強まり、佐世保海軍工廠の発注を受けるための体制づくりがなされた。

農業においては、機械灌漑の普及と晩稲作付体系によって次第に生産力を伸ばし、反当収量を増やしてきたが、それは遂に日本一までになった。これが注目されたのは、単に反当収量の増加ということでなくて、労働集約と共に資本集約が進んだことにあった。しかも、資本集約においても、肥料などの流動資本充足から機械灌漑設備や動力脱穀機などの固定資本の充実を伴い、その生産力推進の主体が自小作層であったことに大きな特色があった。

ここに佐賀農業は「佐賀段階」という日本農業発展の一段階を画するものとなり、全国的に注目されるようになった。

満州事変後、日本は満州国を樹立させて、中国進行体制を強め、それは遂に日中戦争になった。日中戦争によって経済統制は強化され、軍事生産に主力がおかれるようになったが、佐賀地域でも、佐世保海軍工廠や小倉陸軍造兵廠の発注を受けて軍事品の生産が行われるようになった。

戦時体制の進展は、諸分野における統制の強化を伴ったが、それはまた諸組織の一元化の方向づけとなった。これまであまり進行しなかった佐賀地域の銀行合同が促進されたのも、その現われであった。農業生産も戦時体制の強化によって生産諸条件の整備が円滑にゆかなくなり、「佐賀段階」を形成した佐賀地域の農業も次第に停滞化するようになった。太平洋戦争に入ると一段と統制は強まり、すべてが戦争遂行のために動員されるようになった。物資は配給制度になり、国民生活は極度の物不足のために逼迫し、非軍事生産部門での就業者は転職を強いられて軍事工場へ徴用される者が相次ぎ、また女子も女子挺身隊に編成されて工場などに動員される者が多くなった。教育分野においても、学徒の勤労動員体制が敷かれ、農繁期に農業労働に従事する体制がとられ、それは更に通年制の軍事工場での労働という状況にまでなり、このため多くの学徒が佐世保などの軍事工場で働くようになった。

太平洋戦争の激化に伴い日常生活は一段と苦しくなった。空襲の危険に備えるために防空演習が度々行われ緊迫した情勢になってきた。この頃では、佐賀市内の多くの工場は何らかの軍需品生産を行っており、いわゆる国家総動員体制が一層強化されていた。しかし、農業部門では徴兵などによる農家労働力の不足や肥料欠乏などによって生産は停滞した。農家経済も強制出米制度によって統制されていたが、農業生産諸条件の荒廃に伴って、窮迫化するようになった。

昭和二十年八月五日に、佐賀地域の一部が空襲を受け、戦争の脅威が直接的になった。戦争体験は第八章に市民から寄せられた体験記を載せているが、戦争が市民にとって何であったかを、これから読みとることができよう。

昭和前期は、こうして戦争によって市民生活が多くの困難をきたした時期であったが、この苦しみから解放されたのは、昭和二十年八月十五日の日本敗戦であった。

以上のように、本巻で扱うのが激動の時期であるだけに、佐賀地域も大きな変化がみられ、明治期と異なる状況になった。しかし、この時期は絶えざる戦争によって生活が窮乏し、また諸権利も国家目的遂行のためということで著しく制限され、庶民にとっては暗くて苦しい時期であった。

一　市勢の展開

(一)　市政機関と市議会

1　執行機関

明治二十三年（一八八九）五月以降の歴代市長・助役・収入役については、その詳細な一覧表が『佐賀市史』上巻（昭和二十年刊）に収められており、最も整備されたものであるので摘記しておく。

歴代市長

氏名	就任		退任	勤続年数
石丸源作	明治二十二年五月二十日	（年俸　五〇〇円）	明治二十四年十二月	二年七月
石丸勝一	明治二十五年二月二十六日	（年俸　五〇〇円）	明治二十九年二月	四年
永田暉明	明治二十九年四月十六日	（年俸　五〇〇円）	明治三十一年二月二十三日	一年十月
村岡致遠	明治三十一年十一月二十二日	（年俸　五五〇円）	明治三十二年九月	十月
石丸勝一	明治三十二年十月二十六日	（年俸　六〇〇円）	明治三十八年十月二十五日	六年